

柳宗悦が、招かれずに、ここを訪れる
胡昉

1.

わたしたちが白木村に着いたのは、太陽が間もなく地平線に没しようとする頃だった。見事な茜色の空の下、一面に広がる栗林は、葉を落として寂しげな枯れ枝を冷気に晒し、素朴で潔い美しさを印象づける。風(フォン)という名の青年が村の入り口の老木の下で、中国式の青い上着をまとい、袖に両手を入れて立っていた。軽く挨拶をし、わたしたちを案内してくれた。辺りは静まりかえり、地面を踏む微かなサクサクという足音さえ聞きこえるほどだった。

中庭に入ると、大小の犬がはしゃぎだした。風と青(チン)2人の手作りの陶器の数々を、わたしたちは飽かず眺めた。居間(冬は工房になる)の小卓を囲んで座り、プーアール茶が、小さな碗に注がれるのを見ていた。この碗も風の手作りの品で、酒を呑むのにも用いるという。

陶芸家は誰でも茶の淹れ方には必ず一家言ある。茶と陶芸の関係は、茶と言葉の関係のように縁が深い。私たちはお茶を飲みながら、なぜここに来たのかなどあれこれ話を始めた。時々、もつと言葉が必要だと感じたが、それ以上に言葉が余分に感じることの方が多い。この旅の間ずっと何度も感じたが茶の芳香に包まれて、言葉を口にする必要を感じなかった。言葉と言葉の間の静寂こそが私たちのコミュニケーションを支えていた。

互いのことは何一つ知らなかつたのに、出会いは長く待ち望んだ末の出来事のように感じられた。(別れを述べたとき、わたしたちの言葉で青は何かを思い出し、この情景を夢に見たことがあるような気がするといった。)

2.

田中功起の「一念」のため、陶芸家を訪ねる私たちの旅は初冬に始まった。これは現地調査でもなければ、陶芸のための専門的な研究でもない。それよりも、陶芸を媒介にして、偶然の巡り合いと友人からの手助けを通して、「一期一会」を求める旅であり、田中の「一念」を実際に行う旅でもあった。

田中の「一念」は多くの要素から成り立っている。柳宗悦、濱田庄司、田中の故郷である益子町と益子参考館、日用の陶器、地震の際に壊れたそれらの破片、ありふれた日常の経験、手と心、私心と無私の心、現代美術とひとが生きるための技術、等々がそこに関わっている。

わたしたちは、民藝運動の孕む逆説について議論をかさねた。柳宗悦と濱田庄司が主導した民藝運動は、近代社会の人の心を癒し、普遍的で個人主義を超えた、民藝の美を再認識させることを目指した。ところが、民藝運動はむしろ個人意識の高まりを後押しすることになり、かつて作

家の名を記すことのない協働作業であった作陶は、個人的で作家性を強調する芸術活動へと変容した。さらに、柳宗悦が尊び、称揚した「無銘の美」や神秘的な「他力」は忘れ去られる結果になったのである。

3.

陶芸家で映画制作も手がける譚紅宇(タン・ホンユイ)のドキュメンタリー映画を観ていなければ、陶芸と人の暮らしの歴史的な関わり、そして今日の陶芸をとりまく困難な状況を、これほど早く深く理解することは難しかったであろう。譚紅宇、陸斌(ルー・ビン)、鄭律(ジェン・ウェイ)による『西南陶紀-中国南西部の少数民族の陶芸技術』は、中国南西部に暮らす少数民族の間に今日まで受け継がれてきた原始的な陶芸の手技を体系的に調査し、これを紹介したものである。人類の歴史的な進化の過程における陶芸技術の変遷を通じて、ひとと生存に不可欠な土地や自然との関係に、どれほど大きな隔たりが生まれているかが見て取れる。譚紅宇が手がけたもうひとつの映画『土と生きる』は、海南島に住む黎族の85歳の陶工羊拜亮(ヤン・バイリヤン)の平凡な一日を描いている。羊のこのうえなく原始的な陶芸技術と共に、映像は彼女の一生を振り返り、その心の底に埋もれた世界の豊かさ、深み、孤独を観るものに実感させる。映画は亡夫を偲ぶ羊の言葉と共に終幕を迎える。「ひとは老い、やがて死ぬのです。つまるところ、この土塊とそっくりではありませんか」。これを聞いてわたしたちは、陶芸が人の生命エネルギーの統合しようとする力と分裂させようとする力を受け止めており、生き延びようとする人間の根源的な欲求と、じつに密接に結びついていることに気づかされる。

柳宗悦が民藝には近代社会を癒す力があると主張した背景に、近代化がアジアにもたらした波瀾と喪失感が関係したとすれば、陶芸という、人間が生き延びるために編み出した最古の技術は、今日のわたしたちにどのような可能性を与え、わたしたちが世界との結びつきを取り戻そうとする時、どのような手助けをしてくれるのだろうか。「芸術の実践」と「生きるための技術の鍛錬」が不可分であるとするなら、その結びつきをどのような方法、試行によって、取り戻すことができるのだろうか。

4.

別の日、大勢の人が行き交う巨大な茶の市場をそぞろ歩くうちに、阿南(ア・ハイ)の店にたどり着いた。大きな店ではないが、一歩中に入れば、並の店でないことはたやすく感じ取れた。お茶を賞味しながら、茶の成長過程や今日の茶葉の生産法について話を訊いた。そうなれば中国の茶市場の混乱、ひいては人の心の混乱にも触れないわけにはいかなかった。会話は四方山話の域を出ず、まとまりはなかったが、現代に生きる複雑な心模様にどうしても話は戻ってしまったのだ

った。

何よりわたしたちを魅了してやまないのは、物が姿を変えるときに生じる見通しの不確かさ、そして混沌である。土の塊がひとの手の中で緩やかに形を調えるにしたがい、作者の心と手はじかに結びつく。その姿は心を表し、彩色や焼成の過程で土が生みだす微妙な変化は千変万化する人の心のようである。自然の素材は人の思い通りにはならず、人をつねに挑発し、驚きをもたらす。こういった相互の関係こそ、真実を追求する唯一の道なのだろうか。

旅の途上、わたしたちはそれぞれに出自が異なり、境遇も異なる陶芸に関わる人々と出会った。田中に多様な可能性を考えるようにと、彼らは様々な質問をしたが、そのひとつは、陶芸は再び「無銘の」協動作業になりうるか、であった。

白木村を訪ねた当日、風は茶を注ぎながら、軽い口調でこう答えた。「もちろん可能ですよ。私の心になりさえすればよいのです」。この言葉にわたしたちは何も応えなかつたが、可能性の扉が目の前に大きく開くのをすぐに感じたのだった。

5.

田中功起の協動作業に関する一連の試みの中で、私たちが目にするのは、たいていの場合作家の提案を受けて何人かのひとが集まる、ある「瞬間」である。人々は集まり、日常の行為を踏まえながら、それを超えた試みをする。(九人の美容師がひとりの)髪を切る。(五人のピアニストが同時に一台の)ピアノを弾く。(五人の詩人が一緒に一篇の)詩を書く。(六人の陶芸家が一客の)陶器を作る(本稿執筆時点ではこのプロジェクトは作家の頭の中にあり、実現はしていない)などである。

もしも田中の「一念」がなければ、人々がこうして集うこと、こうした試みをすることもなかつただろう。この試みの結果は田中自身が管理するものでも、決めるものでもない。それどころか彼はただ脇に立ち、事態の進行を静かに見守るだけである。アーティストは作らず、その瞬間が生じるよう促すのである。さらに、そこに居合わせるひとを、撮影チームもふくめて自分の作業に、集中させる。だれもがその場で生じていることに意識を集中し、次第に自分自身の存在から遠ざかり、より広い境遇に溶け込んでいく。そのときその場を広大で優雅な静寂が覆っていることを感じ取ることができる。話や動作をしても、自らの存在に執着することなく、だれもがたえずエネルギーを分けあい、互いの存在を認め合おうと努める。

こうした「瞬間」が、柳宗悦の憧憬した「救済」を生み出すのではないだろうか。この「瞬間」が救済の意味を持つとすれば、わたしたちはこの「瞬間」を不斷に創り続けなければならない。それによって集められるエネルギーは、騒々しい世界でさえ一変させ、私たちにわずかな時間を残す。このわずかな瞬間こそが世界そのものであり、長い年月を経た後でも、わたしたちはいつでもここに帰ることができるのだ。

柳宗悦が、招かれずに、ここを訪れる。陸羽(1)もまたしかり。すべてはここを訪れ、深い沈黙を

守ってここにとどまる。

わたしたちが出会ったのには
なにかしら理由があったはず
そう定めたのは運命
互いが互いを思えば
風の動きが早まり
未知の世界にわたしたちを誘う

【註】

(1) 陸羽(733-804)は、茶について世界で始めて体系的にまとめた著書『茶經』によって茶の聖人「茶聖」として崇められている人物。